

VIVONS RELAX! …

——肩の力を抜いて生きようぜ！

篠沢 秀夫

聞き手：佐多 保彦 株式会社東横機 代表取締役社長

佐多：先生のご専門はフランス文学ですね。500頁以上ある『フランス文学案内』をお書きになっていることを、仏文を専攻する私の娘から教えられました。そこに登場するフランス作家の作品をすべてお読みになったのですか？

篠沢：全部を読むわけにいきませんでした。それぞれ作家について原文を1頁でも2頁でも読んだ経験があるので、勘がつかめるのです。アテネ、フランスで、多数の作家の短い原文をたくさん読み、フランス語だけで行われる直接法のクラスで勉強したおかげです。フランス文学の流れを首尾一貫させて脈絡を付けたため、一人で5年かけて書き上げました。特定の作家にかたよらずに、フランス文学全体を簡潔なスタイルにまとめたのです。

佐多：先生は、なぜフランス文学を天職とされたのですか。

篠沢：欧州を知るには、英文学やドイツ文学ではなく、フランス文学が絶対に必要だと思ったからです。なぜならフランス文学は、英文学より4世紀も早い10世紀から始まっていますし、11世紀に英国を征服して英国王室を始めたフランス貴族たちは英国でもフランス語しか話さなかったことを本で読み、中学生の私は「フランス語がイングランドを征服した」と考えたのです。

佐多：日本とフランスは似ているとお考えですね。

篠沢：徳川家康とアンリ4世、それぞれの国家統一の時期がほぼ同じですし、日本が中央集権化に成功した時期も、フランス革命のわずか80年後でした。また両国とも義務教育が徹底しており、地方の人達が心の中で100年も200年も前の歴史的な郷土愛をもち続けているという点でも似ています。

例えば、ブルターニュ地方の農民たちはフランス革命から200年を経た今日でも、農産物問題などで中央政府に反抗し続け、50万人もの人たちがいまだに家の中ではフランス語ではなく歴史的なガルト語を話しているのです。

また日本の東北地方にも似たような人たちがいます。私の所へは、なぜか北の地方からの講演依頼が多いので、ある時、講演会で「私が講演に行く所は、行けども行けども賊軍の地」と話したところ誰も笑わず、講演会の後で、ひとりの中年紳士が肩をふるわせ、いからせながら私に迫ってきました。「賊軍（そくぐん）とは当地では言わない、東軍と言てほしい」と訂正を求められたのです。お若いのにまだ、こんな150年も前の明治維新の言葉を気にかける人がいることに驚きました。しかし私が「今後そう言うようにいたしましょう」と言った途端に、スーツと肩が下りて、おだやかな、人のよさそうな紳士になりました。

佐多：郷土愛も愛国心の一部かと思いますが、人々が愛国心に目覚めるのはどういときでしょうか。

篠沢：フランス大革命で近代的な愛国心が発明されたときにも、外国の王たちが革命つづしに傭兵隊を差し向け、危機意識が高まりました。日本の愛国心はペリー艦隊の浦賀来航に発していると思います。こういう危機意識が愛国心を目覚めさせるのです。今日、自由化やグローバル化が国境を越え、それぞれの国に危機意識を与え始めています。フランスをはじめとする欧州連合でも、日本でも、この危機意識から、大国の責任の自覚という意味での愛国心に目覚めることが求められています。

佐多：先生は昨年末『愛国心の探求』という本を新しく出版されました。先生とはブルゴーニュのご縁で、ワインを飲みながらいつも愉快なお話しばかり聞かせていただいておりますので、この本を通して、先生のもうひとつの面を深くお教えいただくことができました。先生の遺言の样にも感じ驚いた次第です。どのようなきっかけでこのご本を書かれたのか、お聞かせください。

篠沢：平成10年のサッカー・ワールドカップ、日本のナショナル・チーム第1戦の日、フランス南西部トゥールーズの大スタジアムで日の丸を顔にペイントした青年男女が「ニッポン・チャチャ



篠沢 秀夫 / しのざわ・ひでお

1933年 生まれ。
1959年 東京大学文学修士。
1968年 パリ大学フランス文学教員免許。
1963年 明治大学法学部専任講師、66年助教授。
1971年 明治大学法学部教授。
1973年 学習院大学文学部教授、現在に至る。

この間、
1977年から1988年 TBS系クイズ・ダービーに出演。
1991年1年間、パリに在住、フランス地方を旅行。
1992年から1996年 日本テレビでザ・サンデーのコメント。
1996年 ワイン騎士団のシェヴァリエを叙任。

主要著書

『フランス文学案内』朝日出版社
『もうひとつのフランス—地方は今』白水社
『日本国家論—花の形見—』文藝春秋
『愛国心の探求』文春新書

ゃ！」と叫んでいるのをテレビで見ました。至る所で日の丸が振られていて感動的でした。どこの国のサポーターたちも、自分の国名を連呼し国旗を振っていました。「ニッポン・チャチャチャ！」という偉大な国際感覚が、日本にも自然な形で定着していると嬉しく感じ、これも新しい愛国心の表現ではないかと思いました。愛国心についてこれまで考えてきたことを、私の経験で裏付けて書いたのです。

佐多：今年初めに、なかにし礼さんが『長崎ぶらぶら節』で直木賞を受賞されました。「この国を愛するように、この国の言葉を愛したい」と受賞のことで書かれています。日本語を大事にして、世界に通ずる日本の良さを「普遍性」という観点から再認識すると、それを大切に育てて行くこと、そして世界中の人々から愛され信頼される国を目指したいですね。

篠沢：『愛国心』という言葉が世界で最初に使われたのは、フランス大革命の時、一夜で作詞作曲された「マルセイユ節（ラ・マルセイーズ）」の歌詞の中でした。この歌がパリで有名になり、今日までフランス国歌として伝わっています。愛国心という言葉は、日本には明治維新の頃、輸入、紹介されたのです。

佐多：『愛国心の探求』の「序章 今なぜ愛国心か」の中でお書きになっているように、先生が終戦を迎えられたのは、12歳の時だったそうですね。

篠沢：敗戦前後の日本人の変わり様はショックで悲しかった。一夜にして兎奔米英から「陽気



なアメリカの兵隊さん」へ新聞の論調が激変し、大和魂はどこへいったのか、日本は精神においても負けた、それまでの自分の人生が全部崩れてしまったと、国民学校6年生の私は敏感に感じました。

近頃では講演でも「昭和20年8月15日以降、僕は一日として心から楽しかった日はありません」と言うことにしています。しかし戦後、日本的なものの全てが悪いように言う人たちがいますが、そうではない。また、今の小学生くらいの世代には、ソ連の崩壊と日本の戦後民主主義のたどった歴史、そして日本の国旗、国歌について長い議論のあったことも伝えたいと思いました。

佐多：日本もここ10年間、世界の人々が普遍的と考えるグローバル・スタンダードのルールやモラルを急速に模索する方向に動き出していますが、日本のシステムは、依然として内向きのムラ社会のままではないでしょうか。

篠沢：日本のシステムは外国人には非常にわかりにくく、またそこがおもしろいところでもあります。国内と外国とを区別し日本は特殊だとする考え方を乗り越えられれば、世界に通用する日本になります。別に外国もそんなに変わったものではないのです。フランスも日本も結局は同じなのです。今の不況の中で日本人は平成の敗戦を味わっていますが、日本の経済のやり方すべてが悪い、と自信をなくす必要はありません。

日本的なものの全部が悪いみたいに考えることはやめて、負け方をうまくしようと言いたい。あらゆる局面で勝たなくてもよい。何か、これをやったぞ、やっているぞ、というものがあれば、それ以外は楽な方がいい、負けばなしでいい。あらゆる局面で勝とうとするから、みんな肩が張っちゃうわけですよ。かっこ悪いことはしたくないと思っていると、緊張度が高くなる、くたびれてしまう、早死にしてしまう(笑)。肩をはらずに緊張せずに楽しく生きるための「もの考え方」を身に付けよう。維新の戦いで負け方、太平洋戦争で負けた経験から学ぼう。

勝つことばかり考えずに、負け方の方も学ぼう。

また国のシステムを考えると同時に、日本人ひとりひとりが自分自身で構築した観念構造で考えるよう努力しなければなりません。自分はこういう人間だと思い込んでいるものを自分で乗り越え、自分についての正しい認識と経験を積んで、自分の観念構造を作り上げましょう。世界から情報を受け取り、学ぶためには、受け取るための観念構造が個人の中にしっかりできていることが必要です。できていないと、すぐに聞き逃したり、忘れてしまい、情報にならないのです。

21世紀の情報社会と世界の中で、日本の愛国心は、かつての国家愛だけが突出した戦時愛国心とはまったく違うものでなければなりません。愛国心は文化の産物なのです。それぞれの国の文化によって、愛国心のあり方は異なります。日本固有の文化や文学を愛する心をもてる人が、他国人の文化を理解できるのです。そういう人こそ、対等でおだやかな国際交流ができるのです。どんな時代になっても、文化としての日本の歴史を忘れずに、日本の文化への責任と自覚をもつことが、新しい日本人の愛国心ではないかと思います。

佐多：あるフランス文学の教授が、日本では文学より漫画の方が盛んで、そのうち大学での授業もデジタル大画面を使って漫画でやる時代が必ず来る、とにかく日本はこれで結構最先端を走っているのだ、漫画を馬鹿にするなかれ、と言われていました。ダイナミックに多様に変化している日本の若者文化をどう思われますか。

篠沢：アニメや漫画本の映像文化に押されて、文学が衰退してきています。日本では、本の漫画やアニメの世界にクリエイティブなパワーが潜り込んでいて、文学の代わりをしているようです。フランスも日本と似た状況で、日本製のアニメや漫画がテレビで大流行です。

だからと言ってアニメみたいなものだけに留まってしまうと嘆くことも、そうなるべきだと言いつけることもいらない。そんなことしたら肩に

力が入りますよ。アニメもある、文字文化もある。いいじゃないですか。

また、あのいろとりどりに髪を染める若者にも、日本の大人が比較的寛容なのはいいですね。日本で茶髪は単なるファッション、ある時期ハシ力にかかるようなものですから、大きな心で受けとめてあげることが大事です。一生俺は茶髪よなどと突っ張って生きるなんて考えられないでしょう。

実は、私は「クイズ・ダービー」という番組で、いつも大学教授と思われない最低点に甘んじていました。それを見て笑っておられた方も多かったことでしょう。それもそうなんです。テレビ局の人たちは私の読んでいる新聞や雑誌、本などすべての情報源を調べあげて、私が絶対に知らないこと、あるいは関心をもっていないことばかり質問してくるのですからね。それでいつも「デキガワルイ」と笑われてお茶の間でかえって喜ばれていました。

おわかりでしょう、私から皆さんへのメッセージは、「肩の力を抜いて生きていくことが大事なのですヨ」ということをお伝えしたかったのです。そうでなければ明るく生きて行くことはできませんから。

佐多：肩の力を抜いて生きること……そこに生命力の泉あり、ですね(笑)。

